トマス・ジェファソン（二）

――人間本性論・共和国論・ニグロ奴隷制論――

清水忠重

Summary

Thomas Jefferson (2)
His Thoughts on Human Nature, Republic and Negro Slavery

Tadashige Shimizu

In the previous paper we saw Jefferson's understandings on human nature and republic. The theme of this paper is about his views on Negro race and Negro slavery which can be said to be derived from his understanding on human nature. As for the Negroes' intellectual endowments Jefferson stated that "Comparing them by their faculties of memory, reason, and imagination, it appears to me, that in memory they are equal to the whites; in reason much inferior……; ……in imagination they are dull, tasteless, and anomalous." But as for their heart, he said that "we find among them numerous instances of the most rigid integrity, and as many as among their better instructed masters, of benevolence, gratitude, and unshaken fidelity," and so on. In short we can recognize two contending values here and it is worth notice that a high evaluation of Negroes' heart (moral sense) forms a striking contrast to a low evaluation of their head (reason).

As for slavery, Jefferson raised an objection to this institution not from the viewpoint of the oppressed that slavery suppressed Negro's freedom and natural rights, but from the master race's convenience that the continuation of slavery destroyed the good customs and manners of white yeoman republic. This passive anti-slavery logic seems to be a foregone conclusion of his negative Negro race view. Because if the Negroes' biological rank is lower than the white's and they are defective in reason, it should be self-evident that they can not know how to exercise their natural rights and that they can not be good citizens.

In the ante-bellum period Jefferson's above mentioned two-sided Negro image was to be torn into the opposite directions with the rise of rationalism and romanticism. The scientists of "American school of ethnology" who inherited Jefferson's inductive and positivistic mind collected several hundreds of skulls of five races and compared the capacities of them. By this statistical method they demonstrated the inferiority of Negro's head (reason) and advanced a scientific defense theory of southern slavery. On the other hand, northern pastors and novelists of romantic inclination, such as A. Kinmont, W. E. Channing, Mrs. Stowe and others glorified Negro's moral and religious character, and created a "Black Christ" image symbolized in Uncle Tom as an effective anti-slavery weapon.

（三）ニグロ人種論・ニグロ奴隷制論

ジェファソンのニグロ人種論および奴隷制論は、かれの人間本性論、共和国論の枠組みの中でどのように位置づけられているであろうか。この問題をかれがまとまった形で論じているのは『ヴァージニア覚え書』においてである。ニグロ人種論は本書「質問14」でニグロ植民を説く理由のひとつとして論じられている。ジェファソンは解放された奴隷はどこかよその土地に植民される必要があるとし、その理由として二つのものを挙げる。第一は奴隷反乱と人種戦争の恐怖、すなわち「白人が抱いている根強い偏見。黒人にとっては忘れることができない、今までに受けた虐待。新しい怒りの挑発。自然が作り上げた眼に見える差異。そしてその他にも多くの情況がわれわれを二つの部分にわけ、社会秩序の紊乱をうみだし、それは多分どちらかの人種が絶滅するまで終ることなく続くであろう」[63]というもので、これは「政治的な」理由とよばれている。

植民の第二の理由は、白人とニグロの間にみられる顕著な人種資質（本性）の違いである。ニグロ人種論はこの箇所において展開されている。ニグロの身体的特徴にかんしてジェファソンはまず「われわれの心を捉える第一の相違は、皮膚の色についてである。ニグロの黒さというものは、皮膚と皮膚の表皮との間の網状組織の皮膜のなかにあるのか、それとも皮膚の表皮そのもののなかにあるのか、またその黒さは、血液の色あるいは胆汁の色に由来するのか、それとも何か他の分泌液に由来するものなのか、そのいずれであるにせよ、この相違は、自然（nature）に根ざしているのであり、まるでその所在や原因がわれわれに十分知られているかのように、現実のものなのである。そして、この相違には、重大な意味がないのだろうか。この相違はまた、二つの人種の美しさが異なることの基盤となってはいないだろうか」[64]と述べて皮膚の色に着目する。blackという言葉にはエリザベス朝以来、不吉な（sinister）、有害な（baneful）、邪悪な（wicked）、不正な（iniquitous）、残忍な（atrocious）といった好ましからざる意味が含まれており、建国期のアメリカ人も黒を肉体的、精神的な劣等性と同一視する傾向にあったが[65]、ジェファソンはこの黒を環境ではなく人種資質に根ざしているとみるわけである。右の引用文のあとかれはすぐ言葉をつづけて次のような実感のこもったニグロ蔑視を表明する。「黒人の表情を支配しているあの永遠の単調さ、あらゆる感情を蔽いかくしているあの黒い不動のヴェールよりも、白人のように赤と白がみごとに混じりあい、皮膚の色にさす紅潮の程度によってあらゆる感情が表現される方が、より一層好ましくはないだろうか。さらに加えて、流れるような髪の毛や、より優美な身体の均整。また、オランウータンが自分自身の種族のメスよりも黒人の女性の方を好むのとまったく同様に黒人が白人をより好むことからわかるとおり、黒人自身も白人の方が美しいと判断していること。われわれが、馬や犬その他の家畜をふやすときに、より美しいものをと心がけることは大切なことであると考えられている。それならば、なぜ人間の場合に、そうであってはいけないのだろうか」[66]。このあとさらに身体の表面に毛髪が少ないこと、強い不愉快な体臭を持つこと、白人ほどの睡眠時間を必要としないことといった叙述が続く。

ニグロの精神的特徴にかんしては、人間本性論のときと同様、「頭脳の資質」（すなわち理性）と「心の資質」（道徳感覚）の二つに分けて論じられる。そして「頭脳の資質」にかんしては、さらにフランシス・ベーコンの分類にしたがって「記憶力」、「推理力」（狭義の理性）、「想像力」の三つに分けて論じられ、[67]「記憶、推理、想像などの能力で彼らを比較してみると、記憶力の点では白人と同じであると思われるが、推理力では、ユークリッドの研究を追ったり、理解したりすることのできるものはほとんどいないだろうから、白人に比べてかなり劣っており、想像力は鈍く、下品で、異常であると思われる」[68]と、あたかもニグロが「頭脳の資質」の点では一人前の人間ではないかのような蔑視を表明している。

ただしかしもう一つの「心の資質」にかんしては、ジェファソンは「より多くの事実があつめられて頭脳の資質という点では自然はニグロたちに白人ほどのものを授けなかった、というこの推測が実証されることになろうと、なるまいと、とにかく私としては、心の資質という点では、自然はニグロに対しても公平であったということが理解されるだろう、と信じている。……彼らの中には、もっとも厳格な誠実さ（the most rigid integrity）を示す実例が数多く見られるし、さらに慈善心（benevolence）や感謝の気持（gratitude）、ゆるぎない忠実さ（unshaken fidelity）などの実例は、彼らよりも高い教育をうけている主人たちの間にみられる実例に劣らぬくらい多いのである」[69]と説いて、なまじ高い教育をうけた白人よりも心の点ではニグロの方が優っているという好意的な評価をくだしたのであった。要するにジェファソンのニグロ人種論には二つの基線が張られているわけで、理性面でのあからさまな蔑視と、補足的に付け加えられているとはいえ道徳感覚面での高い評価という対照的な把握がなされているわけである。

ところで論議をさらに一歩進めて、このニグロの人種特徴なるものがいかにして形成されたのか、人種差なるものがいったいいかにして生じたのかという原因にかんしてはジェファソンはどのように考えていたのであろうか。これについてはじつは当時、人祖単元論と多元論という二つの説が学界で提起されて、大きな論議を呼んでいた。単元論は人類の祖先はもと一つであったが、その子孫が地表に散らばり定住する過程で環境の影響をこうむって諸人種へと分岐をとげたとするもので、アダムとイヴに全人類の祖先をもとめる聖書の考え方はこれを代表するものであった。この場合、多少なりともすべての人種の同祖性と同質性が前提とされているわけで、思想的にいって単元論は人種平等の方向にむかいやすいといってよい。他方、多元論は地球上には最初から複数の人祖が存在していたと考えるもので、それぞれの人種の祖先は最初から別個で異質であったと考えるわけである。したがってこの立場では、人種間の先天的な差異（ないし優劣）が強調されやすいといえる。単元論が環境決定論の考え方であるとすれば、多元論は「資質（自然）」（nature）決定論であるといってもよい。

十八世紀末のアメリカ思想界において宗教家サミュエル・スタンホープ・スミスの著した『人類の皮膚の色および姿態の多様性に関する一試論』（一七八七）は聖書の説く単元論のテーゼの正当性を論証しようとした最大の労作であり、建国期の環境決定論的思考を代表する著作であった。[70]ヨーロッパの学界でもリンネ、ビュフォン、カント、ブルーメンバ

ッハ、キュビエなど名だたる学者はすべてこの聖書の教説と一致する学説にくみしていた。しかしジェファソンが『ヴァージニア覚え書』で示したニグロ人種論はこの時期には異端ともいうべき多元論の立場であった。[71] かれはこの著作のなかで「黒人が白人と混りあった場合、最初から黒人が身心ともに進歩向上することは、誰もが目にしてきたところであるが、その事実は、黒人の劣等性が単に彼らの生活条件（condition of life）の結果だけではないことを物語っている」[72]と述べ、その例証として古代ローマの白人奴隷は合衆国のニグロ奴隷よりもずっと劣悪な条件下にあったにもかかわらず、しばしば学芸に秀でて主人の子供たちの家庭教師をつとめたものだったといった事例に言及したうえで、「頭脳の資質」における「白人と黒人との相違を生みだしているものは、彼らのおかれた条件（condition）なのではなくて、自然（nature）の力だということになる」と結論づけて、人種差が環境ではなく人間本性（人種資質）に根ざすことを強調した。[73] 他方、ニグロの「心の資質」にかんしては、「彼らが今まで汚名を着せられてきた窃盗に走りやすいという傾向は、彼らのおかれている状況（situation）に着せられるべきものであり、道徳感覚（moral sense）が堕落しているためと考えられるべきものではない」と述べて、この面では逆にニグロのもつ生来の道徳資質を擁護したのであった。[74]

ニグロ論の末尾ちかくでジェファソンは、扱われている対象が「物質ではなく人間の能力に関するもの」である以上、また結論次第によっては「ある一つの人種全体を、造物主によって定められた諸生物間におけるその地位から下落させてしまう」ことにもなりかねない以上、「推理力や想像力にかんする能力において彼らが劣っているという見解は軽々に口にすべきではない」[75]と述べて急に慎重になり、これまで述べてきたことを打ち消すようなことを口にしている。そしてジェファソン自身、後年、「ニグロ資質に関する疑問点を『ヴァージニア覚え書』で述べた以上に婉曲に、躊躇しながら表明することは不可能であった」[76]と述懐したように、その論旨は「矛盾し、しばしば混乱し」（史家マッコリー）[77]ていて、『ヴァージニア覚え書』のなかでも最も歯切れの悪い箇所となっている。しかしかれの行論を虚心坦懐に読むかぎりその根底にはっきりニグロ蔑視とニグロ資質にたいする異和感が流れていることは否めないであろう。

ちなみに同時代人のイムレー（Gilbert Imlay）は『北アメリカの西部テリトリーの地形』（一七九七年版）の中で、ジェファソンほどの人物が不幸なニグロにたいして恥ずべき偏見を抱いているのを見るのは羞恥に耐えないと前置きしたうえで『覚え書』の人種論を批判し、皮膚の色の「相違は資質に根ざしているのではなく、単なる気候の結果にすぎ」ず、この相違は現実にはなんの重要な意味もないこと、白人のほうが身体つきが優美であるというが、むしろプロポーション、筋力、運動能力の点で比べてみるとニグロの方が上であること等を説いた。そしてオランウータンがニグロ女性の方を好むという「根も葉もない話」（the idle tales）に信をおき、こうしたいいかげんな事例をもちだしてニグロが人類とオランウータンの中間にあるかのように暗示しようとするジェファソンの軽率な推論を批判して「われわれが身体的にも知的にも本質的に同じであることは明らかである」（it is certain we are essentially the

same in shape and intellect.）と断言し、中年の男が口にするにはやや甘過ぎるとしかいいようのないジェファソンの陶酔した口調の白人賛歌に冷笑を浴びせたのであった。[78] またジェファソンの論議はのちには自由ニグロからも「彼らはわれわれが白人になりたがっているとか、彼らの皮膚の色にあこがれていると思っている。しかし彼らは恐るべき思いちがいをしているのだ。われわれは、われらの創造主がよしとされて造られたままでいいのだ」（デーヴィッド・ウォーカー『ウォーカーの訴え』）[79] といった手厳しい口調で批判に付されることになる。こうした批判からも分るように、『覚え書』に示されているニグロ人種論はジェファソンの得意とする事実主義、データ主義の手法を離れてやや主観に走り過ぎているという感じが確かにしないでもない。しかしそれは裏からいえば、そのぶんだけかれの生身の感情が偽らずに吐露されているということでもある。

ニグロにたいするジェファソンの蔑視はインディアンにたいするかれの高い評価と顕著な対照をなしているといえる。同じ『ヴァージニア覚え書』の「質問6」においてジェファソンはインディアンにかんして、「新世界の人間は肉体的にも精神的にも『ヨーロッパ人』と同じ尺度につくられている」（they are formed in mind as well as in body, on the same module with the 'Homo sapiens Europaeus.'）、白人もインディアンも「自然（資質）は同じ」（nature is the same with them as with the whites.）である、[80] 両者のちがいを生み出した原因は「資質（nature）ではなく環境（circumstance）の差異にもとめらるべきである」[81] と繰り返し説き、かれ特有の名文で情熱的なインディアン賛歌をうたいあげた。「インディアンは、大群の敵に対しても自らを守ろうとし、たとえ自分をていねいに扱ってくれると分かっている白人が相手の場合であっても、つねに降伏よりは死を選ぶ。その他の状況にあっても、かれはより慎重に死に立ち向かい、また、われわれの社会における宗教的熱狂にもほとんど見られないほどの固い決意をもって拷問に耐えるのである。インディアンは子どもを愛し、大切にし、そして極端なほど子どもに甘い。……インディアンの感受性は鋭敏で、戦士でさえ子どもを失ったときははげしく泣く。ただし一般にかれらは人事を超越しているかのようにみせようと努力するが。インディアンの精神の活発さや活動は、同一の状況下ではわれわれと異るものではない」。[82] そして「質問14」のニグロ論の箇所ではニグロの推理力や想像力とわざわざ対比する形で、インディアンは「最高級の雄弁でわれわれを驚かせるが、それは彼らの推理力や感情がなかなか強いものであり、彼らの想像力も強烈で気品があるということを立証している」[83] と述べて対照的な評価をくだした。またインディアン国家にあてた手紙のなかではしばしば「あなたがたがわれわれと同じように所有しているあの理性を行使すること」（the exercise of that reason which you possess in common with us）[84] を促し、資質の点でかれらを白人と対等に扱った。そして第二回大統領就任演説（一八〇五年三月四日）ではインディアンにかんして「かれらは人間としての能力と権利をもち」（Endowed with the faculties and the rights of men.....）云々と述べ、J・モース（Jedidiah Morse）あての手紙（一八一二年三月六日）では「あの尊敬すべき不幸な人々」（the respectable and unfortunate people）と呼んだが、こういう表現はニグロにかんし

ては決してしなかったものである。[85]

ニグロにかんする総合評価としてジェファソンはその人種論の末尾で「私はニグロがもともと別個の人種であるのか、それとも時代や環境によって別個のものとなったのかはともかくとして」と、聖書の見解を正面から否定する多元論のテーゼをはっきり打ち出すことは慎重に控えつつも、「与えられた才能という点では身心両面で白人よりも劣っているのではないかという気がするとだけ、申し述べておきたい」[86]と述べて婉曲ながらもはっきり蔑視的な態度を示した。そして「博物学の愛好家すなわち動物のあらゆる品種における等級を哲学の目を通して眺める人は、人類という分野でも自然が定めたとおりの序列を守ろうと努めることを、許さないであろうか」[87]と反語的に問いかけて混血が自然の理に反することを暗々裡に説き、人々のなかには「一方で人間本性の（この場合はニグロの――筆者）自由を擁護したいと望みながら、同時に他方では人間本性の（この場合は白人の――筆者）高貴さと美しさとを守りたいという気持ちも強いのである」[88]として二律背反の心理に大きな理解を示したのち、本題の植民論議にふたたび立ちかえってニグロ人種論の結びとしている。すなわち、

「ローマ人たちの場合、奴隷解放のためには、解放という一つの手段だけを講じればそれでよかった。解放された奴隷は、（白人であったから、…訳者）主人の血を汚さずに、混り合ったであろう。しかしわれわれの場合には、その後に、歴史上に例をみないような何らかの手段を講ずることが必要である。すなわち奴隷たちは、解放された暁には、血の交わりのできない所へ移されるべきなのである」。[89]

『覚え書』を公にして以後もジェファソンは折りにふれて、白人とニグロの資質の差異、ニグロ資質の劣等性という根拠に立って混血反対を口にした。たとえばEdward Colesにあてた手紙（一八一四年八月二十五日）の中では一定の期日以後うまれた奴隷を解放し教育をほどこしたのち、かれらが一定の年齢に達したら国外に追放（expatriation）するという解放・植民プランをしめし、「彼らと他のカラーとの混血は、愛国者や人間本性の卓越性を愛する者なら無邪気に同意することの出来ないような退化（degradation）をうみだします」と述べた。[90]また『自伝』（一八二一）のなかでも「運命の本にはこれらのひとびと（ニグロ――筆者）が自由であるべきだということがこの上なくはっきり書き込まれています。同様に二つの人種が等しく自由な状態で、同じ政府のもとで生活することはできないと言うこともまた確かです。資質、習慣、見解のちがいが両者のあいだに拭うことの出来ない区分線を刻みつけているのです」[91]と述べて、白人とニグロの共存不可能性を強調したのであった。

ジェファソンはニグロ奴隷制にかんしてはどのように考えていたであろうか。[92]ジェファソンの奴隷制批判はそれが依拠した論拠の種類に応じて、二通りのタイプに分けて考える必要がある。一つは「イギリス領アメリカの諸権利についての要約的見解」（一七七四）および「独立宣言」原案に盛り込まれた見解である。「要約的見解」のなかでジェファソンは、アメリカ植民地が奴隷輸入を禁止しようとしたにもかかわらず、イギリス国王が拒否権を行使してその努力を踏みにじり、「アメリカ諸邦の永続的な利益よりも、またこの悪名高い慣行（奴隷貿易及び奴隷制――筆者）によってふかく傷つけられている人間本性上の諸権利」より

も、少数のイギリス海賊船の利益を優先させたことを強く非難した。[93] また最終案からは削除されたとはいえ、「独立宣言」原案には、「彼（イギリス国王――筆者）はまさに人間本性そのものに対する残忍な戦いをしかけ、彼に危害など一度も加えたことのない遠隔地のひとびとの生命、自由というもっとも神聖なる諸権利を侵害し、これらのひとびとをとらえ、拉致して他の半球の奴隷制下におき、またそこへの輸送の途次、悲惨な死へといたらしめた」という一節が含まれていた。[94] これらの公文書に盛られた奴隷制批判の特徴はそれが人間本性論に依るという体裁をとっていること、つまりニグロの自然権をもちだし、そこから奴隷制を叩くという正攻法をとっていることである。ただこれら公文書の眼目はイギリス国王の所業を弾劾することにあるのであって、ニグロの自然権の擁護はいわばこれを裏から強調するための一つのレトリックにすぎない。少なくともこれらの文書はニグロの自然権擁護を主眼において書かれているわけではない。しかも独立戦争中のヴァージニアの政治家たちはジェファソンにかぎらず奴隷制に批判的な外部世界（北部およびフランス）の政治家や軍人たちの協力をとりつけることを念頭において発言する際、往々よそいきの顔でこうした正論を唱え大義名分を口にしたのであって、[95] こうした公文書からジェファソンの奴隷制反対論を引き出したり、こうした文書に奴隷制反対の論拠をもとめたりすることはむしろ誤解を生ずるものといえよう。

ジェファソンはこれらとはまた別の見地から奴隷制への反対論を展開している。それは被抑圧者ニグロの自然権をもちだすのではなく、逆に主人にとっての不都合、白人共和国にとっての有害性という見地からの反対論である。『ヴァージニア覚え書』の立論はこの見地にたつものといってよい。奴隷制とヴァージニア憲法を批判したこの著作が南部プランターの感情を害することを恐れて、かれはこの著作が一部の知友を越えたひろい範囲にまで流布されることを望んではいなかったといわれる。[96] しかしこの一書を贈られたジョン・アダムズがその礼状の中で、本書の「奴隷制にかんする数節は珠玉の価値を持っております（The Passages upon slavery, are worth Diamonds.）。それは単なる哲学者の書いた数巻の書物にもまさる影響をおよぼすことでありましょう」と述べて、その率直な奴隷制論に大きな賛辞を贈ったことからもうかがわれるように、大義名分を標榜した「要約」や独立宣言原案とはちがって、『覚え書』にはジェファソン自身の実感に密着した、足の地についた奴隷制反対論が展開されているといってよい。[97]

『覚え書』の「質問18」のなかでジェファソンは二つの（相関連する似たような）理由をあげて奴隷制の有害性を論じている。一つは白人自営農民を担い手とする（奴隷制に立脚しない）共和国を理想視する立場からの批判で、奴隷制は共和国の良き習俗（manners）を破壊し、教育的・道徳的に白人に悪影響をおよぼすという批判、いま一つは被治者の合意のない抑圧的な支配体制には暴力的な破綻しかないという認識、つまり奴隷制は最終的には奴隷反乱と人種戦争に帰着するに相違ないという（植民論議のときに持ち出したのとおなじ）不安である。まず前者については次のように述べられる。

「主人と奴隷との交わりは、もっとも荒々しい感情を絶えずやりとりすることにつきる。すなわち主人の側にはもっとも過酷な形の専制が、

奴隷の側には屈辱的な服従があるだけなのである。われわれの子供たちはこれをみて、そのまねをすることを習い覚える。なぜならば、人間は模倣の動物だからである。この模倣という特質は、人間のすべての教育の根源でもあるのだ。……親が奴隷に対して荒れ狂うと、子供はそれを眺めて怒りの表情にかぶれ、奴隷の子供たちに対して同じような態度をとり、人間のもつもっともいまわしい感情の赴くままに任せてしまうのである。こうして子供は、いわば暴虐のなかで育まれ、教育され、毎日それを訓練されているのであるから、当然いやらしい特徴を身につけないわけにはいかないのである。このような環境のなかでも自己の習慣や徳性を堕落させずにもちつづけられる人間がいたら、それはまさしく驚異的な存在といわねばなるまい。一体、このように市民の半分が残りの半分の市民の権利を踏みつけるようなことを許容して、前者を専制君主に仕立てあげ、後者をその敵にまわすようにさせ、さらに前者の道徳を破壊し、後者の愛国心をも破壊してしまうようなことをする政治家には、いかなる呪いを負わせるべきであろうか。……人々の道徳が破壊されるのにともない、その産業もまた破滅に導かれる。なぜなら、暑い気候の土地では、自分の代わりに他人を働かせることができる人は、誰も自分自身が働こうとはしないからである。[98]」

この引用箇所で中心的に論じられているのは奴隷制の存在が「われわれヴァージニア人の生活様式（manners）に不幸な影響を及ぼしている[99]」という白人共和国のあるべき姿に照らしての批判、いいかえれば奴隷制が共和国の担い手である白人支配層を腐敗、堕落させ、共和国の良き習俗を破壊するという見地からの批判である。この奴隷制批判はニグロ人種論（本性論）を基礎にして、ニグロは資質上、生来の譲り渡すことのできない諸権利を持っているにもかかわらず、それが侵害されているという被抑圧者の権利に依拠しての批判ではない。先にみたように、『覚え書』においてニグロ人種論（本性論）は植民論議のいわば根拠づけとして展開されており、この両者は論理的に直結している。しかしニグロ人種論（本性論）と奴隷制反対論とはそのようにストレートな形で直結してはいないし、また直結しえない性格のものである。なぜならニグロ資質（理性）の劣等性をもちだして奴隷制肯定論を展開するのならともかく、劣等性に依拠して奴隷制反対論を組み立てるのはむしろ難しいことだからである。ジェファソンのように人間の権利を一貫して自然（資質）のうえに基礎づけようとする場合、ニグロのようにその自然（資質）自体に重大な欠陥があるかもしれないような場合、当然その権利のほうもそれ相応に疑わしくなってくるわけで、生物学上のランクが一段低いのではという疑念が拭い切れていない以上、ニグロの自然権を積極的に擁護する論理は期待しがたい。理性的存在とみなしえないニグロには自然権を認識する能力や自治能力などはもとから備わっていないのであり、自然界の法則を認識する能力もないのであって、「自分自身を統治するということは、われわれの自然権である」[100]〔トマス・ペイン〕といった命題も当てはまりにくくなる。少なくとも健全なる共和国市民としての資格はニグロにはない。また理性を欠くこうした人間に教育をほどこすのも無意味なことであり、この人種を主体的にとりあつかわねばならない理由も存在しなくなる。人種論にみられる婉曲な表現にもかかわらず、ジェファソンの目にニグロ資質の劣等性が動かしがたい事実と

して映っていたことは明瞭であって、もしニグロが事実、下等な存在で一人前の人間とみなしえないとすれば、それはとりもなおさず「造物主がニグロをそのようにお創りになったのであり、教育も自由もその他いかなる改善も自然の事実に変更を加えることはできないということは自明の理」（史家ジョーダン）[101]になってしまって、人為的なこざかしい境遇改善の努力など無意味とならざるをえない。かつて史家ディッギンスはジェファソンを論じた論文のなかで人種差別主義が「理性の時代」とともに台頭したのは皮肉なことであったと述べたことがあるが[102]、じつはこれはアイロニーではなく、むしろ理性重視の時代であったればこそ、ニグロは差別されねばならなかったのである。そしてそうした蔑視的立場にもかかわらず、ジェファソンは奴隷制には反対の立場をうちだそうとしているのであって、もしそうしようとすればその論拠は当然のことながらニグロ人種論とは別のもの（共和国論）とならざるをえなかったわけである。

ジェファソンは右の引用文のあと奴隷制の有害性にかんする二つめの理由、すなわち人種戦争の不安を次のように論じている。

「人民の心の中に、自由は神から授けられたものであり、それを侵害するものは必らず神の怒りを買うのだという確信があることは、一国民の自由にとって唯一の確固たる基盤なのであるが、この基盤を取り除いてしまったとき、果してその自由は安全な状態にあるといえるであろうか。神は公明正大であること、神の正義は永久に眠ってはいないこと、奴隷の数や問題の本質、自然の手段方法だけから考えても運命の車輪が逆転し、主客立場が入れ替わることもありうるのだということ、そしてその大変化は、超自然的な干渉によって可能となるかもしれないこと、などに思いを馳せるとき、まったく私はこの国のために戦慄を禁じえない。そうした争いが起こったときに、万能の神はわれわれの側に荷担するような性格をもってはいないのである。……現在の革命がはじまって以来、私はすでに一つの変化が見受けられるように思う。まず奴隷の主人の側の意気が衰えつつある一方、奴隷たちの心も屈辱の状態から立ち上りつつあり、その生活条件も緩和されつつある。私は、全体の動向が神の御意志のもとに完全な奴隷解放の方向に向かっているものと思いたい。しかもこれが、最終的には、奴隷所有者たちを根絶（extirpation）するというような方法によるのではなく、むしろ彼らの同意（consent）を得てなされることを希望するものである[103]」。

ここでジェファソンを憂慮させ、戦慄させているのはニグロの自由の侵害それじたいにかんする罪深さと良心の痛みというよりも、むしろそれ以上にこの侵害が人種戦争と白人の根絶をもたらすかもしれないという悪夢であり、恐怖感である。被治者の合意を欠いた暴力支配は暴力によって破局を迎えるしかなく、暴力支配の極みとも言うべき奴隷制は、それにたいする反抗として武力蜂起以外に生みだしようがない。しかもそれが主客逆転と奴隷主の撲滅という恐るべき事態を帰結するとすれば、白人にとってこれ以上おそるべき事態はない。それはニグロの自然権尊重などよりはるかに一層ゆゆしく切実な問題であったといわねばならない。

被抑圧者の権利ではなく、白人支配者の側から奴隷制を見るこの観点は、終始一貫してつらぬかれていて、たとえばニグロの窃盗に走りやす

いとされる傾向に言及した先述の箇所でもジェファソンはこれに続けて次のように論じている。

「法律によって財産を保護されていないような人間は、多分、他人の財産を保護するために作られた法律をうやまわねばならないという感情など薄いに相違ない。自分のために議論するときにはわれわれは法律が公正であるためには権利の交換をともなわなくてはならぬとし、この点を抜きにしては法律など良心（conscience）ではなく武力（force）に立脚したたんなる専横な規則にすぎなくなってしまうということを当然視してかかる。これは奴隷主に解答してもらいたい問題なのだが、財産の侵害をいましめる宗教上の訓戒は、彼の奴隷のために存在するのとおなじように、奴隷主のためにも存在するのではないだろうか。奴隷は自分を殺そうとする者を殺していいのとおなじように、自分からすべてを奪っている者からほんのわずかのものを盗んではいけないのだろうか」[10]。

これはジェファソンの公正感がもっともよく発揮された箇所の一つといってよいが、白人本位の発想はすこしも払拭しきれていない。かれは自分の提起している重大きわまりない問題を最初から主人の解くべき問題として設定しているのであって、決して被抑圧者たるニグロにむかってかれらを自然権にめざめさせるべく呼びかけているわけではないからである。抑圧の犠牲者の自然権擁護を正面に据えるのではなく、もっぱら白人共和国を維持するうえでの不都合や有害性をもちだすこの一貫してネガティヴな性格の奴隷制反対論は、要するにかれのニグロ人種論のしからしむるところであったといわねばならない。

ニグロ人種論と植民論、奴隷制反対論の関連について一言しておこう。奴隷制論議と植民論議とは次元の異なる問題であり、それぞれの論拠も当然異なってくる。したがってこの両者を混同してはならない。事実『ヴァージニア覚え書』でもすでにみたようにニグロ植民論はニグロ人種論に依拠して提唱され、ニグロ人種論の結論としてみちびきだされているのにたいして、奴隷制（反対）論のほうはヴァージニアの「慣行と習俗（customs and manners）」の項目で論じられ、ニグロ人種論とは別の箇所で論じられている。ジェファソンはニグロ資質の劣等性を論じたのち、それに依拠するかたちでニグロの国外駆除政策（植民政策）を提唱した。しかし同じこのニグロ人種の劣等性論議をもちだして奴隷制に反対することはもちろんできないわけで（それはむしろ逆効果であり、奴隷制肯定をこそみちびきだす）、かれは奴隷制にかんしてはこれを共和国との関連でとりあげ、人種資質とは別の論拠から奴隷制反対論を展開したのであった。ニグロが資質上、理性を欠き、自然権の担い手としての資格を欠くとすれば、この被抑圧者の権利侵害を云々する論議はあまり説得力をもたないわけで、奴隷制への反対は結局、主人にとっての不都合、白人共和国にとっての有害性といった見地からなされざるをえなかったわけである。

しかしジェファソンのニグロ植民論と奴隷制反対論はともに人種戦争（奴隷反乱）の不安をベースにして説かれているという点ではオーヴァーラップしており、人種戦争の恐怖は両者の共通項をなしているといえる。かれは人種戦争について個人的な手紙の中で繰り返し表明した。ちなみにセント・ジョージ・タッカー（St. George Tucker）にあてた手紙（一七九七）では次のように述べている。「黒人をどこに移住させますか

……。もしあることがなされないなら、すぐになされないなら、われわれはわれわれ自身の子供たちの殺戮者になってしまうでしょう。現在地球上を吹きまくっている革命の嵐は、やがてわれわれの上にも襲ってくるでしょう。……わが国で騒動が始まる日も、間近いにちがいありません。ただ一せんの火花が散れば、その日は明日にでもやってくるのです」[105]。ホームズ（John Holmes）あての手紙（一八二〇年四月二十二日）ではニグロ奴隷を解放して「正義」を施そうとすれば、白人の「自己保存」が危うくなるという自家撞着の不安を狼の比喩でもって次のように説明している。「あの種の財産（奴隷財産のこと―筆者）――――と、こう誤って呼ばれているわけですが――――を放棄することなど、もしそうすることによって奴隷の全面解放と国外追放が実施できるのならば、躊躇せずに実行したら良い些細なことです。そして漸次的かつそれ相応の犠牲を払うならば、それは実行できるかも知れないと思います。しかしながら現在のところわれわれは狼の耳をつかんでいるのであり、狼を取り押さえておくこともできなければ、これを安全に立ち去らせることもできない状態にあります。一方の天秤皿には正義がのっており、他方の天秤皿には自己保存がのっているわけです」[106]。

おわりに

――アンテ・ベラム期におけるジェファソンのニグロ人種論の展開――

ジェファソンが自然という言葉を口にするとき、それは今日われわれが自然景観、自然現象というときに使う自然よりももっと哲学的な、思想の根底にかかわってくる深い意味を持っていた。この時期、自然という概念は精神的存在からはっきり区別された物理的、物質的存在の領域のみを意味していたのではなく、独立宣言がアメリカの政治的独立の根拠として自然（「自然の法と自然の神の法」）を持ち出したように、それは「真理の出所（origin）および基盤」にかんするものであり、「超越的な啓示を必要とせず、それ自体で確実かつ明白であるような……真理はすべて自然に属する」という性格のものであった[107]。ちなみに最晩年のジェファソンは「独立革命は、われわれが自分の好きなことを自由に描くことができる一冊のアルバムを贈ってくれましたから、われわれは、カビ臭い記録を探したり、王室の羊皮紙文書を漁ったり、なかば野蛮な祖先の法律や制度を調べたりする必要はありませんでした。われわれは自然の必要に訴えました」[108]と述べて、自然が共和国建設の出発点であったことを強調した。

ジェファソンの人種思想をみる場合にも――――つまり人間はすべて平等に創られているという独立宣言の言葉の中にかれがニグロもふくめて考えていたかどうかといった点を検討しようとする場合にも――――、人間にかんするかれの定義がまず問題になるわけで、ここでもやはり問題は自然（人間のそれ、すなわち人間本性）へと帰着する。そしてそのさい理性と道徳感覚が等価におかれ、この二つが基線に据えられていることについては既にみたとおりであり、かれのうちには十九世紀前半に独自の対照的な思想的展開をとげることになる科学主義、合理主義の契機とロマン主義の契機が同居していたといってよい。

科学者ジェファソンの一面について言えば、これを代表するのはかれ

の唯一の著書『ヴァージニア覚え書』であろう。これはよくいわれるように建国期を代表する第一級のそして最も広範な影響をおよぼした科学的業績であって、この書物の出版は「アメリカ哲学協会」の再興、「アメリカ学芸アカデミー」の創設とならぶ画期的な出来事であった。[109]『覚え書』の記述スタイルと論証方法は、ヨーロッパの碩学の提示する抽象理論を天下り的に援用するというものではなく、あくまでジェファソン自身の手で収集し、かれがじかに観察した具体的な諸事実からのみ結論を導き出す、それも安易な理論化を急がず、出来るだけおおくのデータを収集し、帰納しうる範囲でのみものをいうという姿勢に徹したものであった。[110]『覚え書』はまたよく「統計の書」(a book of statistics)[111]ともよばれるように、ここにはヴァージニアの諸河川の長さにかんする表、植物・鳥の種類にかんする一覧表、ヨーロッパとアメリカの四足動物の比較表、ウィリアムズバーグの降水量・気温・風向にかんする測定値の表、ヴァージニアの住民数の推移や郡ごとの民兵数にかんする統計表、インディアンの部族名・人数・居住地域にかんする一覧表などがぎっしりと詰めこまれており、数量化にたいするジェファソンの旺盛な志向を顕著を示している。[112]この著作は当時の学術論文の水準をはるかに抜く徹底したデータ主義と実証的、帰納的手法に依拠していたといってよい。

この冷静堅実な科学的志向とならんで、ジェファソンの思想にはもうひとつ別のロマン主義的要素が宿っていた。理性(大学教授)のくびきを断ち切って感情(農夫)を自立させ、ある面では後者の優位性を主張する心情、コスウェイ夫人あての手紙においてすでに具体的にみたように、噴出する情感が理性の抑圧と枠組みを突き破ろうとするかのようなエモーショナルな傾向である。

ジェファソン個人の内面で生じつつあった「頭脳」(科学主義)と「心」(ロマン主義)の相克は一八四〇年代のアンテ・ベラム期にははっきりと本格化し、それぞれ独自の契機として自立した歩みを開始し対極的な思潮を形成するにいたる。そしてこの二つの思潮に棹さすかたちで、ジェファソンのニグロ人種論もニグロ劣等視の方向とニグロ理想視の方向へと明確な分岐と両極化をとげた。

ジェファソン思想の料学主義と実証的手法をうけついでこれを発展させ、反聖書的な人祖多元論の学説を展開したのがアメリカ人種学派(American School of Ethnology)の科学者グループであった。「厳密科学」が云々されはじめたアンテ・ベラム期にこの学派の領袖S・G・モートン(Samuel George Morton)は、――かつてジェファソンが『ヴァージニア覚え書』のなかでニグロ人種の位置づけないし評価については、ことが人間の能力にかんするものであり、結論次第によっては「ある一つの人種全体を、造物主によって定められた諸生物間におけるその地位から下落させてしまうことにも」なりかねない以上、慎重を期する必要があるとし、より多くのデータ収集の必要性を訴えた(「面目ないことだが、一世紀半もの間……われわれはこの人々を博物学の対象として眺めたことはまだ一度もなかった」[113])のをうけて、――数百にものぼる五大人種(コーカサス、モンゴル、マレー、アメリカ、エチオピア)の頭蓋骨を世界各地から収集し、その容量を比較測定した。そして計量的、統計的手法でもってニグロ人種の頭脳(理性)面での劣等性を論証し、南部奴隷制の科学的擁護論を展開したのであった。「私は起源を

異にし、皮膚の色をはじめ、その他、精神的肉体的差異によって特徴づけられる二つの人種が共存している文明の現段階において、奴隷州にこんにち存在している関係は悪であるよりも善、しかり積極的な善であると考えます」というJ・C・カルフーン（John C. Calhoun）の連邦上院での演説（一八三七）は周知のように奴隷制擁護論の最初の公式な表明として有名であるが、この演説はまた建国期にジェファソンがくみし、かつその当時としては異端的であった多元論のテーゼを再表明したものでもあった。奴隷制擁護論の登場は多元論のテーゼの復活、台頭でもあったわけで、アンテ・ベラム期におけるこの学説のもっとも代表的な標榜者こそほかならぬアメリカ人種学派であり、かれらはこの点でジェファソン思想の直系と呼びうる人々であった。この学派のメンバーは自分たちが「自然」の立場に依拠していることを終始力説し、十九世紀なかばという時代状況のなかでジェファソンの農本主義思想をそのままうけつぎ、ジェファソンと同様「自然の貴族」という言葉を口にした。そして「自然」（すなわち資質）の立場に依拠して白人内部での出生や家紋による一切の人為的差別を排撃し、白人すべての同質性と平等性、ニグロの異質性と生来の劣等性を強調したのであった。[114] このラディカルな白人平等とニグロ差別の要請はいわばジェファソン的自然（資質）の論理に内在する必然的な帰結であったといってよい。

ジョサイア・C・ノットが『人類の聖書的ならびに自然科学的歴史の連関にかんする二つの講演』（一八四九）のなかで、聖書にみる「神の啓示をうけた記述者たちの使命はたんに道徳的なものであるに過ぎず、その啓示は科学の領域までをも覆うものではなかった」[115] と宣言したように、アメリカ人種学派の論客は当為と存在、「道徳の法則」（moral laws）と「自然の法則」（physical laws）[116] を峻別して、聖書の字句の妥当範囲をせまく道徳界のみに限定し、自己の足場を自然の領域に置いてその思想を展開した。これにたいして道徳の領域に依拠する北部の宗教家や人道主義者たちは民族精神と人種資質の独自性と個性を賛美するロマン主義の思潮に乗って、ニグロの道徳的資質を美化する作業を精力的に押し進めていった。牧師A・キンモント（Alexander Kinmont）やW・E・チャニング（William E. Channing）らはアメリカ人種学派と同様、白人が理性面に秀でた科学文明の唯一の担い手であることを認めつつも、しかし心の資質の点ではニグロの方がはるかに勝るとして、ニグロ人種を逆の側面から賛美したのであった。そして支配欲旺盛で闘争心のつよい白人はその資質においてキリスト教的美徳の習得には生来不向きであるが、従順、謙虚で忍耐強く、愛情深いニグロはいわば「生まれながらのクリスチャン」であるとして、ニグロ資質の優秀性に手ばなしの賞賛をおくった。

ちなみにチャニングは『奴隷解放』（一八四〇）においてニグロの人種資質を白人と対比する形で次のように描いて、奴隷性の非人道性と奴隷解放の安全性を訴えた。

「ニグロはもっとも優しく温和な人々のひとりである。……その資質は愛情に富んでおり、物事に容易に感動しやすい。それゆえ彼らは白人よりも宗教的な感受性が豊かである。ヨーロッパ人種はこれまで勇気、進取の気性、創意工夫の才といった点では優れたものを示してきた。しかしキリスト教がとりわけ愛でる気質に関しては、彼らはアフリカ人

と比べてなんと劣っていることであろう」。

「じつにヨーロッパ諸国民のすべてに関していいうることかもしれないが、彼らはキリスト教精神とは相反する気質で水際立っているといえる。……ヨーロッパ人種のすべての法のなかでももっとも強力に根をはっている『決闘法（law of honor）』は今日にいたるまで、キリストの人格と言葉に正面から対立するものである。アフリカ人は柔和で我慢強く、愛情深い美徳の胚種をわれわれよりもずっと豊富に持ちあわせている。西インド諸島のニグロ達のあいだに短期間滞在したさい、私は彼らの進歩向上する能力に感銘を覚えたことがある。各方面で私は人間本性のなかでも最も高貴な資質である彼らの宗教的傾向について耳にしたのであった」。

「私はアフリカ人種が文明化した場合、活力、勇気、知的独創性の点ではわれわれに劣るにしても、愛情、静穏、優しさ、満足といった点ではわれわれ以上のものを示すであろうと期待している。……かかる人種を鎖につないでおかねばならないような理由などないのであって、彼らを無害にするのに鎖などいらない」[17]。

おなじようにキンモントも『人間の自然史にかんする十二の講話』（一八三九）のなかで、ニグロの人種資質とかれらが将来作り上げるであろう文明の質を次のように論じている。

「キリスト教の甘美な優美さは、白人の心の土壌に生育するにはあまりにも熱帯的でか弱い植物のように思える。それが植え付けられ自然に美しく成長するには一定の人間本性が必要なのだが、その大体の特徴をひとはニグロ人種のうちに見いだすことができる」。

「幾時代かが過ぎて、ニグロ人種の文明の時代がやってくるとき、彼らはその故国に、われわれ別個の人種にはいまのところ想像もつかないような何か非常に独特で興味深い性格の特徴を示すにいたるであろう。それは必ずや独特な型の文明であることだろう。あえて言えばそれはたぶん技術よりも一定の美質を特徴としており、科学によって特徴づけられ飾られているよりも、新しい愛すべき神学によって高められ洗練された文明、すなわち神の光を反映し、白人の知性がこれまで示してきたものよりももっと完璧で愛情に富んだ文明であることだろう」。

「その早熟な才能と生来の迅速さと技術に対する極度な適性からもうかがわれるように、もし白人が神の英知（the divine wisdom）の光、もっと適切にいえば神の科学（the divine science）を反映するべく運命づけられているとするならば、われわれは、遅咲きではあるが遙かにいっそう高貴な文明がその前途にまちうけているニグロを羨むべきではないか。より温和でより優しいあらゆる美徳を実践することによって、慈悲と慈愛という神の属性の光輝を反映しているニグロを羨むべきではなかろうか」[18]。

この理想化されたニグロ像を集大成し完成させたのがストウ夫人の『アンクル・トムズ・ケビン』である。ジェファソンが『ヴァージニア覚え書』の中で、ニグロたちの中には「もっとも厳格な誠実さを示す実例が数多く見られるし、さらに慈善心や感謝の気持、ゆるぎない忠実さなどの実例は、彼らよりも高い教育をうけている主人たちの間に見られる実例に劣らぬくらい多い」と述べて、ニグロの「心の資質」を高く評価したのを受ける形で、この小説の主人公トムは「彼の行なう素朴で、

誠実で、真摯な型の説教は、彼よりもはるかに教育のある人々をさえ教化するに十分なほどであった。……彼の祈りの、あの人心を感動させずにはおかぬ素朴さと、あの子供にも似た熱心さとをしのぐことのできる者は、おそらく何もなかったであろう」といった調子で、「生来、道徳性がいちじるしく優位を占めている性格の持主」であることが強調され、[119] 知識や学問はないが（つまりもっとはっきり言えば理性には欠けるが）、道徳的にはこのうえなく高潔かつ善良な人物に描かれた。ジェファソンのニグロ資質の賛美が主人にたいする忠実さや感謝の念といった、きわめてネガティヴな性格のもの（つまりはっきり言えば自分自身を統治する能力の欠如）でしかなかったとすれば、ストウ夫人はこれを積極的なプラスの方向へと価値転換させたわけである。この小説は主人公のトムだけでなくニグロ人種一般にかんして、「彼らはその心の優しさ、その謙譲な心の従順さ、より優れた心の上にいこい、より高い力の上に休もうとするその傾向、子供にも似たその愛情の素朴さ、だれをも恕そうとするその心の寛大さ」ゆえに「独特なキリスト者的生活の最高の形態を示す」[120] であろうとして、その道徳資質に第一級の賛辞をおくった。奴隷制の犠牲者をこのように純真、素朴で高邁な人種に描くことによって、『アンクル・トムズ・ケビン』は奴隷制の非人道性と残忍性を裏面から効果的に衝くことができたといえる。建国期にジェファソンの脳裏で表裏一体をなしていたプラス・マイナス両面をそなえたニグロ像は、アンテ・ベラム期には、科者主義の立場から生来の劣等人種であることを宣告されたマイナスのニグロ像と、ロマン主義・人道主義の立場から「黒いキリスト」にまで仕立てあげられたプラスのニグロ像にみごとな両極分解をとげたわけである。

(63) 中屋訳、二四九頁（Peterson, ed., *Thomas Jefferson*, p. 264）。

(64) 中屋訳、二四九-二五〇頁（*Ibid.*, p. 264）。

(65) *The Oxford English Dictionary* の black の項、参照。Curti, *Human Nature*, p. 25.

(66) 中屋訳、二四九-二五〇頁（Peterson, ed., *op. cit.*, pp. 264-265）。
当時イギリスの解剖学者ジョン・ハンターや外科医チャールズ・ホワイトらは諸人種の頭蓋骨研究とりわけ顔面角の測定値によって、諸人種間には序列が存在することを唱え、古くからの「存在の偉大な連鎖」という観念を人々のあいだに広めることに貢献した（John P. Diggins, "Slavery, Race, and Equality: Jefferson and the Pathos of the Enlightenment," *American Quarterly*, 28 (1976), p. 212; ラルフ・ケッチャム（佳知晃子訳）『アメリカ建国の思想』（時事通信社、昭和五十一年）、三一八頁）。この連鎖のどこにニグロを位置づけるかはジェファソンにとっても大きな関心事の一つであり、オランウータンの話はこの問題を念頭において出されている。

(67) ちなみにベーコンは『学問の進歩』のなかで「人間に関する学問の諸部門は、学問が宿る、人間の知力の三つの部門に関係がある。すなわち、歴史は人間の記憶に、詩は人間の想像力に、哲学は人間の理性に関係がある」と述べている。ベーコン（服部英次郎、多田英次訳）『学問の進歩』（岩波文庫、昭和四十九年）、一二六頁。
ジェファソンはさらにこの記憶力（Memory）、推理力（Reason、すなわち狭義の理性）、想像力（Imagination）の三者をそれぞれ歴史（History）、哲学（Philosophy）、芸術（Fine Arts）の各分野に対応させて考えており、書物の分類方法にもこの区分を適用している（Saul K. Padover, ed., *The Complete Jefferson* (New York, 1943), pp. 1091-1093; Peterson, *Thomas Jefferson and the New Nation*, p. 249）。『ヴァージニア覚え書』はほんらいフランスのバルボア侯から受け取った二十二の質問条項に答える意図で

執筆されたものであるが、ジェファソンはこれらの項目を二十三の質問に組みかえて叙述した。史家Quinbyによれば、その際の配列の仕方もこの記憶力、推理力、想像力の三区分法に基づいているという（Quinby, "Thomas Jefferson," pp. 344–349)。

(68) 中屋訳、二五二頁（Peterson, ed., *op. cit.*, p. 266)。

(69) 中屋訳、二五六―二五八頁（*Ibid.*, pp. 268–269)。

(70) Samuel Stanhope Smith, *An Essay of the Causes of the Variety of Complexion and Figure in the Human Species.* ed. Winthrop D. Jordan (The Belknap Press of Harvard University Press, 1965). スミスのこの著作の内容および方法にかんしては拙稿「サミュエル・スタンホープ・スミス」『神戸女学院大学論集』第二五巻第一号（一九七八年七月）を参照。なおジェファソンはケームズ卿の人種理論（人祖多元論）に反駁をくわえたこのスミスの著作に注目していた。Curti, *op. cit.*, p. 82.

(71) LinnaeusとBuffonの研究以来、人間の自然史（natural history）研究は欧米の学界で大きな関心を呼ぶようになっていた。そしてNewtonがアメリカの物理研究の分野に大きな影響をおよぼしたのと同じように、LinnaeusとBuffonはアメリカの博物学の分野に大きな影響を及ぼした（Clive Bush, *The Dream of Reason* (London, 1977), p. 195)。

*Systema Naturae*においてLinnaeusは人間を霊長類（primates）を一つに分類し、人類（the human species）を四つの人種（European, American, African, Asian）に分けた。その後Johann F. Blumenbachが現れて、Linnaeusの人種分類に五番目の人種（Malay）をくわえ、またBuffonの環境決定論の考えをいれて、単一の始祖から種々の人種が分岐した原因を気候、食事、その他の環境要因に求めた。この単元論の主流的見解にたいして、多元論をとなえたのはVoltaireや*Sketches of the Natural History of Man*を著したLord Kamesなどごく少数の人々にすぎなかった（John C. Greene, *American Science in the Age of Jefferson*(The Iowa State University Press, 1984), pp. 322–323, 332)。ジェファソンにたいするこのケームズ卿の思想的な影響については、Peterson, *op. cit.*, p. 55. Quinby, "Thomas Jefferson," p. 340n. Gilbert Chinard, "Jefferson among the Philosophers," *Ethics*, 53 (1942–43), p. 258.を参照。

人種の起源にかんするジェファソンの反聖書的立場は、後述するように、アンテ・ベラム期に台頭するアメリカ人種学派によって大々的に継承発展させられるところとなる。多元論以外にもジェファソンはアメリカ大陸の山脈のうえに海の生物の化石が発見されることから、天地創造にかんするバイブルの記述を疑問視していたし、an universal delugeが地表を覆ったという説にもくみしなかった。またかれが大きな関心を注いだマンモスの化石は、地球の年齢が聖書年代学の説く数字よりもはるかに古いものであることを暗示するものであった。フェデラリストがジェファソンを無神論者よばわりし、その「瀆神的」見解を攻撃したのは当然であったといえる。M・カーチ、前掲書（上)、三一九頁。Peterson, ed., *op. cit.*, p. 154 (*Notes on the State of Virginia*, Query VI). Peterson, *op. cit.*, pp. 637–639.

(72) 中屋訳、二五四頁（Peterson, ed., *op. cit.*, p. 267)。

(73) 中屋訳、二五六頁（*Ibid.*, p. 268)

ジェファソンは外国人向けにはしばしばとりすましたよそいきの意見を述べている。たとえばフランスの聖職者アンリ・グレゴワール（Henri Gregoire）から「ニグロ文学」にかんする印刷物を送りつけられた際に書いたジェファソンの礼状（一八〇九年二月二十五日）がそうで、この礼状から判断して送付された印刷物にはニグロ人種の"respectable intelligence"を示す数多くの事例が盛り込まれていたようである。ジェファソンはこの礼状のなかで、『ヴァージニア覚え書』で表明したニグロの能力にかんする「わたしの疑問は、わたし自身の州の限られた範囲内での個人的観察から引き出されたものでして、そこでは彼らは才能（genius）をのばすような機会に恵まれておらず、才能を鍛える機会などなおさら一層ありませんでした。ですからわたしは、非常に躊躇したうえで、疑問を表明したわけです。しかし彼らの才能（talent）がどの程度のものであろうとも、それは彼らの権利（rights）をはかる基準にはなりません。アイザック・ニュートン卿が知力（understanding）の点で他のひとびとに抜きんでていたからといって、彼は他の人々の人格や財産の支配者であったわけではありませんでした。……あの人種の立派な知性（intelligence）にかんして、あなたがわたしに多数の事例をおしめしになったことに謝意を表したく思います」（Peterson, ed., *op. cit.*, p. 1202）と述べて、あたかも権利

の上ではニグロも白人も対等であるかのような意見を披露したのであるが、こうした発言は同郷の人々のまえでは絶対にしなかったものである。

この手紙を書いた七、八カ月あと、ジェファソンはJoel Barlowにあてた手紙（一八〇九年十月八日）のなかでは、「かれ（グレゴワール――筆者）は、わたしが二十五、六年まえに『ヴァージニア覚え書』のなかで表明したニグロの知力（understanding）の程度にかんする疑問について、わたしにも手紙を書いてよこしました。そしてニグロ文学にかんするかれの著作をわたしに送ってきました。ものごとを軽率に信じやすいかれ（His credulity）は、ニグロにかんする話を（それが生粋のニグロにかんするものなのか、それともどの程度混血の進んだニグロにかんするものなのかを区別しようともしないで）、たとえほんのわずかしか言及していなくても、あるいは話の出所が信のおけぬものであろうとも、ことごとく手当りしだいに集めたわけです。全体的な印象は、事実の証拠に照らしてみて、われわれ自身がバネカーについて知っているところとは食い違っております。われわれは（ニグロの――筆者）バネカーが暦がつくれる程度には球面三角法について知っていたとは思いますが、しかし（白人の――筆者）エリコット――かれはバネカーの隣人であり友人であって、つねづねバネカーをおだててたきつけていました――の援助なしにこれが出来たかどうかについては、疑いなしとしません。わたしはバネカーから長文の手紙をもらったことがありますが、この手紙はバネカーが実にありきたりの精神（a mind of very common stature）しかもちあわせておらぬことを示しています。グレゴワール司教には、わたしはあなたと同様、非常に口当りのいい返答を書いておきました」（Louis Ruchames, ed., *Racial Thought in America* (The University of Massachusetts Press, 1969), vol. 1, p. 257）と述べて、グレゴワールあての手紙が自分の本意ではないことをはっきり告白している。"his credulity"などというたかをくくった表現は、ジェファソンがグレゴワールをどのような性格の人間と考えていたかをよく示しているといえよう。

なおグレゴワールあての手紙に出てくるバネカーというニグロにかんしては、ジェファソンはフランス人のCondorcetあての手紙のなかでもやはり「非常に尊敬すべき数学者」(a very respectable mathematician) などと言及し、ニグロの劣等性が劣悪な環境のせいであって、人種資質に根ざすものではないことを示すような事例が沢山あつまることを期待しているかのような口ぶりで書いている。(Carter G. Woodson, ed., *The Mind of the Negro as Reflected in Letters Written During the Crisis 1800–1860* (New York, 1969), p. xxviii)。またバネカー本人にあてた手紙（一七九一年八月三十日）のなかではジェファソンは「今月十九日付のあなたのお手紙と、それに同封されていた暦に、心から謝意を表します。あなたがお示しになられたような事例を、つまり自然はニグロ同胞にも他の人種と同じ能力をさずけられたのであって、能力が一見、欠如しているかのように見えるのはただたんにアフリカおよびアメリカにおけるニグロの堕落した生存条件のせいにすぎないのだということを、わたしは他の誰よりもみたいと願っているものです」(Peterson, ed., *op. cit.*, p. 982) と述べて、暦を送られた都合もあってか、きわめて好意的な返事を書いてはいるが、既にみたようにジェファソンはBarlowあての手紙ではバネカーという人物はありきたりな精神能力しか持ち合わせていないとし、白人のエリコットの手助けなしには暦など作れるはずがなかったと推定しているわけである。この数学者バネカーの場合にかぎらず、ジェファソンはニグロがなにか卓越した才能を示した場合、そこには白人の手が加わっているのではないかと疑うのをつねとしたようで、たとえばニグロ作家のサンチョの場合にも、ジェファソンはサンチョの書簡文にかんする自分の批評はあくまで「彼の名によって出版された書簡文が、まぎれもなく本物であり、誰の修正も受けていないものである、と仮定した上でのことであるが、この問題について調査することは容易ではないだろう」（中屋訳、二五四頁。Peterson, ed., *op. cit.*, p. 267）などと述べて、あたかもそこに白人の手が加わっているのを匂わすかのような口ぶりである。

(74) 中屋訳、二五七頁（Peterson, ed., *op. cit.*, p. 269）。

(75) 中屋訳、二五八–二五九頁（*Ibid.*, pp. 269–270）。

(76) 前述のBarlowあての手紙（一八〇九年十月八日）に出てくる言葉である。Ruchames, ed., *op. cit.*, p. 257.

(77) 史家マッコリーは"his conflicting and often confused reasoning on the Negro question"と表現している。Robert McColley, *Slavery and*

Jeffersonian Virginia (University of Illinois Press, Second Edition, 1973), p. 127.

リンネの学説にしたがってジェファソンは人類という単一の「種（species）」のなかに環境の作用がつくりだした白人やインディアン等の「変種（varieties）」が存在するというふうに考えていた。（『覚え書』「質問6」）のなかでかれは「私は、人類には肉体的・精神的能力の異なるさまざまな変種（varieties）がある、ということを否定するつもりはない。他のさまざまな種族の動物についてもいえるような多様性は、人類にもあると私は考えている」と述べている。この場合、変種の自然は同質だと考えられているとみてよい。中屋訳一一一頁（Peterson, ed., *op. cit.*, p. 189.）。しかしニグロにかんしてはこれが白人やインディアンと同じ種（人類 human species）に属するのか、それとも全然別個の異質な種に属するのか、いま一つ判断しかねていたようだ。このこともかれのニグロ人種論を曖昧なものにする原因になったといえる。Daniel J. Boorstin, *The Lost World of Thomas Jefferson* (Boston, 1948), pp. 81–82, 92–93.

(78) Ruchames, ed., *op. cit.*, pp. 174, 175, 178（ここに収録されているのは Gilbert Imlay, *A Topographical Description of the Western Territory of North America* (1797 edition) の一部である）。同じ『ヴァージニア覚え書』のインディアン論においてジェファソンはビュフォンのインディアン論を評して、"the fables of Aesop"と同程度に信用のおけないものと自信満満に一蹴したが（註110参照）、これとちょうど同じことを自分のニグロ論にかんしてイムレーから言われているわけである。

(79) 山形正男・古賀邦子・砂田一郎・小山起功訳『アメリカ古典文庫一九 黒人論集』（研究社、一九七五年）、四六頁。ウォーカーはこのパンフレットの末尾では独立宣言を引用したのち、「アメリカ人よ、あなた方のこの宣言を読むがよい。あなた方自身の言葉を理解できるのか。一七七六年七月四日、全世界に向かって発せられたあなた方のこの言葉に耳を傾けるがよい」と述べて、独立宣言をアメリカ人自身に突きつけている（同右、一〇六頁）。

(80) 中屋訳、一〇七―一〇八頁（Peterson, ed., *op. cit.*, p. 187.）。同様に Chastelluxあての手紙（June 7, 1785）のなかでも「わたしはインディアンは身体的にも精神的にも白人と同じであると確信しています」（I believe the Indian, then, to be, in body and mind, equal to the white man.）と言いきっている（*Ibid.*, p. 801）。

(81) 中屋訳、一〇五頁（*Ibid.*, p. 186）。

(82) 中屋訳、一〇四―一〇五頁（*Ibid.*, pp. 184–185）。ジェファソンはまた会議におけるインディアンの雄弁さと戦場における勇気についても絶賛し、前者にかんしては「たとえば私は、ミンゴ族の酋長ローガンが当時本邦の総督であったダンモア卿に宛てた演説よりもすぐれた一節を、デモステネス、キケロ、およびこの二人よりも著名な雄弁家――もしこれまでのヨーロッパにそのような者がいたらの話だが――のあらゆる演説の中に見出せるか、と挑戦してもよいと思っている」云々と手放しの口調で誉めちぎっている。中屋訳、一〇八―一〇九頁（*Ibid.*, pp. 187–188）。

ところで注目すべきことにジェファソンは、おなじ『覚え書』の「質問14」で――註（83）の箇所でも引用したように――インディアンにかんしてはこのように絶賛したうえで、これとわざわざ対比するかたちで、当時名を馳せていたニグロ作家のフィリス・ホィートリイとイグナティウス・サンチョの作品に言及し、これら後者を酷評している。たとえばサンチョの書簡文にかんしては「彼の想像力は粗野で非常識なものであり、たえず理性や気品などのあらゆるワクから逃避していて、その奔放な空想の過程で、まるで大空を貫く流星の進路のように、気まぐれで風変りな思想空間を残していくのである。彼が扱う主題からすれば、彼はしばしばまじめな推論の過程に進んでいて当然だと思われるのだが、実際にはいつも感情をもって論証の代用としているのである」と述べて、理性の欠如に由来する発想の異様さにあからさまな異和感をしめしている。中屋訳、二五三―二五四頁（*Ibid.*, pp. 266–267）。

(83) 中屋訳、二五三頁（*Ibid.*, p. 266）。

ジェファソンはジョン・アダムズにあてた手紙（June 11, 1812）のなかで、少年時代、チェロキーの指導者アウタッセトの演説を聞いた際、言葉は一語も理解できなかったにもかかわらず、その荘厳な雰囲気に身を震わせ畏敬の念にうたれたことを印象的な筆致で次のように回顧している。「独立革命以前はかれらはしばしばそれも大勢で、わたしたちの政庁所在

地にやってきましたので、わたしはかれらと親密に接触しました。わたしはチェロキー族の戦士であり雄弁家でもあった偉大なアウタッセト［すなわちアウタシティ］のことをよく知っていました。かれはウィリアムズバーグを訪れる際やその帰途、いつもわたしの父の家の客人になったものです。アウタッセトがイギリスに向けて旅立とうとしていた前夜、かれが部族のひとびとをまえにすばらしい別れの演説をした際、わたしはかれの幕営地に来ていました。月は一点の曇りもなく皓皓と照り輝いていました。アウタッセトはその月に向かって、航海中のみずからの無事と、かれの不在中の部族の無事を祈って語りかけるがごとくでした。かれのよく響きわたる声、明瞭な語調、生き生きとした身振り、あちこちで焚火を囲むかれの部族のひとびとの厳粛な沈黙。アウタッセトの発する言葉の意味は一語も分かりませんでしたが、こうした雰囲気はわたしの心を畏怖と尊敬の念で一杯にしました」（*Ibid.*, p. 1263）。七十にほぼ手が届くようになってなおかつこのように生き生きと回想しているわけで、少年期の印象がよほど強烈であったことがうかがわれる。ジェファソンのインディアン論はこうしたかれ自身の実感と体験に裏打ちされていたといえる。

(84) Saul K. Padover, ed., *The Complete Jefferson Containing His Major Writings, Published and Unpublished, Except His Letters* (New York, 1943), p. 465.（これはChoctaw Nationにあてた手紙〔December 17, 1803〕である。この言葉のあと"Follow then our example, brethren, and we will aid you with great pleasure."という言葉が続く）。Cherokee Nationの指導者にあてた手紙にも"according to reason and to the rules you shall establish"といった表現が出てくる（*Ibid.*, p. 561）。同様にMiamis, Powtewatamies, Delawares, Chippewaysにあてた手紙（December 21, 1808）には"You possess reason, my children, as we do"といった表現が出てくる（*Ibid.*, p. 496）。また第二回大統領就任演説では"to induce them to exercise their reason"と述べられている（Peterson, ed., *op. cit.*, p. 520）。

(85) Padover, ed., p. 104（富田訳、一二三頁）。Peterson, ed., *op. cit.*, p. 1454.

ジェファソンはインディアンにしきりに文明化（農耕・家畜飼育）――――すなわちかれ自身の言葉でいえば、"new mode of life" "our mode of living" "our manner of living"の受容（Padover, ed., *The Complete Jefferson*, pp. 474, 489）――――を促したが、その重要な動機のひとつにインディアンの持つ土地を白人に譲渡させるという意図のあったことはいなめない。ちなみにかれはBenjamin Hawkinsあての手紙（Feb. 18, 1803）で次のように述べている。「私は狩猟を営むことだけではもはやインディアンに衣類と食料を供給するのに充分ではないと思います。それゆえ農業と家内工業をうながすことが、彼らの生存を維持するうえで本質的に重要なのでありまして、私はこれに惜しみない援助をあたえ奨励する所存であります。こうしますと彼らはずっと狭い土地でも生活することができ、じつに彼らの広大な森林は家畜の放牧場のためにいる以外は不要となってしまいます。しかも彼らが立派な農夫になるにつれて、放牧場としてすら不要となり、不都合なものとすらなってしまいます。彼らが狭い土地で立派に生計を立てていくすべを学んでいるうちに、われわれの増大しつつある人口はよりいっそう広大な土地を必要とするようになるでしょう。かくて、手放すことのできる土地を持ち、土地以外の必需品をほしがっている人々と、他方、そうした必需品は余分に持っているが、土地を持っていない人々とのあいだに利害の一致（a coincidence of interests）が生まれることになります。したがってこの取引は双方に善をもたらすのでありまして、双方のためを思うものはこれを促進すべきであります」云々（Peterson ed., *op. cit.*, p. 1115）。ジェファソンはDelawares, Mohiccons, Munriesの指導者Hendrickにあてた手紙では「穀物栽培と家畜飼育をすれば、鹿やバッファローを追う土地の百分の一の土地があればよりよくやっていけるでしょう」（The hundredth part in corn and cattle will support you better than the whole in deer and buffalo.）とも述べている（Padover, ed., *The Complete Jefferson*, p. 504）。しかもかれはこの文明化政策を白人とインディアンの両者を益するもの、純粋な道徳と一致するもの"for the good of both" "consistent with pure morality"（Peterson, ed., *op. cit.*, pp. 1115, 1116）と考えていた。かれは白人の価値観や生活様式の優位を自認し、全人類はこの目標にむかって進歩していく運命にあると考えていたので、未開なインディアンが白人文明を受容するのを進歩とみなし、この文明化に援助の手を差し伸べるのは人間愛にかなった「人道

的な仕事」(humane work) (Peterson, ed., *op. cit.*, p. 557) であり、「人間性 (humanity)」の命じるところ (*Ibid.*, p. 520) であると考えて疑わなかったといえる。(この独善性は、白人文明を相対化してとらえていたB・フランクリンとは大きなちがいである。たとえば「われわれは彼らの風習がわれわれのとちがうので、彼らを野蛮人呼ばわりしている。われわれは自分たちの風習が礼の極致と考えているが、彼らも彼らの風習を同様に考えているのである」云々というフランクリンの「北アメリカの野蛮人に関する寸言」(池田孝一訳『アメリカ古典文庫一 ベンジャミン・フランクリン』[研究社、一九七五年] 一二九―一三五頁) の考えと対比せよ)。ルイジアナ購入以後は、ジェファソンは東部インディアンをミシシッピー川の西方に移住させる政策を構想し始めた。Horatio Gates将軍あての手紙 (July 11, 1803) の中でかれは、国会は「これ (ルイジアナ――筆者) を、ミシシッピー川以東のすべてのインディアンを西方に移住するよう促し、われわれの人口を拡散させるのではなく (まずもってミシシッピー以東の地に――筆者) 密集して定住させる手段として使うことができます」(they may make it the means of tempting all our Indians on the east side of the Mississippi to remove to the west, and of condensing instead of scattering our population.) (Koch and Peden, eds., *The Life and Selected Writings of Thomas Jefferson*, p. 571) と述べた。そしてインディアンにたいしては「われわれは最近、フランス人とスペイン人からルイジアナとよばれるミシシッピー川以西のすべての土地を入手しました。そこには赤い肌の人々が住んでいない広大な土地があります。しかしそこはあまりにも遠隔地なので、われわれはあなたがたが手放す意向のあるミシシッピー川以東の土地と引き換えに、そこの土地を提供するか、あるいはお金とあなたがたのもっとも望む商品を提供したいと思います。この問題にかんして今あるいは将来、何か考えがありましたら、われわれはいつでもあなたがたに耳を傾ける所存です」(March 7, 1805) (Padover, ed., *The Complete Jefferson*, p. 472) と呼びかけた。このインディアン移住の構想はしかしニグロ植民と同日に論じられるべきではない。ニグロ植民の場合は混血の防止が主たる目的であったが、インディアンの場合は、土地の獲得が主目的であって、混血にかんしてはジェファソンは一度も反対をしておらず、むしろ肯定的ですらあったからである。たしかにかれはイギリスの扇動にのってアメリカ白人を殺戮したインディアン諸部族にたいしては絶滅や駆逐をしばしば口にした。John Pageにあてた手紙 (Aug. 5, 1776) の中でジェファソンはインディアンが戦争をしかけてきたことを非常に遺憾に思うと述べた後、「彼らの国の心臓部にまで戦争を押し進めていく以外、あの卑劣漢たちをすみやかに屈服させる方法はないでしょう。しかし私は決してそこで手をとめはしません。彼らのうち一人たりともミシシッピー川のこちらがわに留まっているかぎり、私は彼らを追撃する手をとめはしません」(Boyd, ed., *The Papers of Thomas Jefferson*, vol. 1, pp. 485–486) と、あからさまな敵意を示した。またチェロキー族のアウタッセトを述懐した前述のアダムズあての手紙のなかでもジェファソンは、アウタッセトの印象的な描写にすぐつづけて、チェロキーのような開化諸部族はともかく、未開の野蛮なインディアンは「イギリスの誘惑」と扇動に乗りやすいとし、「これらの部属は野蛮で悲惨な状態へと逆戻りし、戦争と物質の窮乏によって数を失うことでしょう。そしてわれわれはかれらを森のけだものたちと一緒に岩だらけの山地 (the Stony mountains) に駆逐しなくてはならないでしょう」(Peterson, ed., *op. cit.*, p. 1264) と、未開への嫌悪と親英派インディアンへの憎悪をだぶらせて語っている。Alexander von Humboldtにあてた手紙 (December 6, 1813) でも、イギリスにそそのかされたインディアン諸部族がわれわれの婦女子にくわえた "the cruel massacres" はわれわれをしてかれらを絶滅と駆逐に追いやることを余儀なくさせるであろうと興奮した口調で述べている (*Ibid.*, pp. 1312–1313)。しかし他方、友好的なインディアンにたいしてはジェファソンは友好をつなぎとめたいという政治的ゼスチャーも勿論あったであろうが、しばしば "We, like you, are Americans, born in the same land, and having the same interests." "You are our brethren of the same land." (*Ibid.*, pp. 551, 557) といった表現を用い、"your blood and ours united will spread again over the great island." "Your blood will mix with ours; and will spread, with ours, over this great island." (Padover, ed., *The Complete Jefferson*, pp. 497, 509) 等と述べて混血を呼びかけている。こうした言葉がただたんに口先だけのゼスチャーではなく、当

時のヴァージニアに一つの強力な世論として存在していたことは、たとえば一七八四年Patrick Henryが邦議会下院（the House of Delegates）に提出した議案の中で、ヴァージニア邦はインディアンと結婚するものの税金を軽減し、生まれてくる子供の教育と養育に補助金を下付すべしと主張していることからも推測がつく（McColley, *op. cit.*, p. 138）。つまりこうした論議はことさら対外向けの外交辞令としてではなく、内部で熱心になされていたわけである。いずれにしてもニグロにたいする態度とインディアンにたいする態度の差は決定的に大きかったと言わねばならない。

なおジェファソンはインディアン国家の指導者たちにたいして、「あなた方が土地を売りたいと思うときにはいつでもわれわれは買う準備があります。しかしこれはあくまであなた方自身の自由意思にしたがってなさるべきです」、「特定の場所で土地が不足し、われわれがあなた方に売るようにお願いすることがあっても、あなた方はつねに『ノー』と自由に返答できるわけで、そう言ったからといって、あなた方にたいするれわれの友情がだめになることは決してありません」と繰り返し述べている（Padover, ed., *The Complete Jefferson*, pp. 474, 491–492）。もし土地を奪うことだけが目的なら、わざわざ農具や農業技術を提供してインディアンの定住に力を貸したり、かれらの自由意思をこのように尊重したりするというまどろっこしい方法をとらなくてもよいわけで、もっと手っとり早い方法があったはずである。すくなくともジャクソン時代の問答無用式の強制移住とは区別して考える必要がある。

(86) 中屋訳、二五九頁（Peterson, ed., *op. cit.*, p. 270）。
(87) 中屋訳、二五九頁（*Ibid.*, p. 270）。
(88) 中屋訳、二五九頁（*Ibid.*, p. 270）。
(89) 中屋訳、二五九―二六〇頁（*Ibid.*, p. 270）。
(90) *Ibid.*, p. 1345.
(91) *Ibid.*, p. 44.
(92) ジェファソンのニグロ奴隷制論を論じる場合、ジェファソンは人種平等主義者であり、奴隷制を心から罪悪視していた（が、南部の保守的プランターの感情を考慮して、奴隷の解放策を積極的に提唱するところまではいかなかった）と好意的にみるか、あるいは逆にかれはニグロ資質を劣等視する人種差別主義者であったとするかのトータルな二分法でわりきるのは適切ではない。ジェファソンはすでにみたようにニグロを全面的に劣等視したり、全面的に対等視したりするような単純な一面的見解の持ち主ではなかった。またジェファソンは思想的には人種平等主義者であったけれども、世俗的な配慮や気兼ねゆえに、あるいはその温厚な性格ゆえに奴隷制批判の筆をにぶらせてしまった云々と問題を性格論的に処理して偽善者あつかいしたのでは、何の説明にもなっていない。少なくとも矛盾（を犯さざるをえなかった思想的な理由）を内在的に説明するものとはならない。さらにジェファソンが逃亡奴隷を執拗に追跡させたといった諸事実は、かれの奴隷制観をうかがううえで知っておくべきことではあろうが、しかし逃亡奴隷の追跡は奴隷主である以上むしろ当然のことであって、こうした補足的諸事実をとりたてて強調することにそれほどの意味はない。状況証拠をかき集めて人種差別主義者の像を性急に作り上げるのではなく、まずもってジェファソンの思想を正面から取り上げるべきであろう。

(93) *Ibid.*, p. 116.
(94) *Ibid.*, p. 22.このくだりが、奴隷貿易の続行をのぞむサウス・カロライナとジョージアの立場を考慮して削られたことは、ジェファソン自身その『自伝』の中で述べているとおりである。*Ibid.*, p. 18.
(95) McColley, *op. cit.*, Chapter Six.
(96) Peterson, *op. cit.*, p. 248.
(97) Cappon, ed., *The Adams–Jefferson Letters*, vol.1, p. 21.
(98) 中屋訳、二九一―二九四頁（Peterson, ed., *op. cit.*, pp. 288–289）。
(99) 中屋訳、二九二頁（*Ibid.*, p. 288）。
(100) トマス・ペイン（小松春雄訳）『コモン・センス』（岩波文庫、昭和三十五年）、六二頁。ちなみに理性と自由の関係について、ロックは次のように論じている。「けれども時には、自然の通常の筋道通りに発達しないで、個人に何かの欠陥の起ることがあり得る。そのためにもし何人かが、法を知りその規律に従って生活するだろうと想定される程度の理性を獲得しないとすれば、その者は決して自由人となり得ず、決して自分自身の欲するままには放任されない」、「人間の自由および自分の意志に従って行為する自由は、理性を彼がもっている、ということに基づいているといえる」。ロッ

ク（鵜飼信成訳）『市民政府論』（岩波文庫、一九八七年）、六三、六五-六六頁。

(101) Winthrop D. Jordan, *White over Black. American Attitudes Toward the Negro, 1550–1812* (The University of North Carolina Press, 1968), p. 453.

(102) John P. Diggins, *op. cit.*, p. 213.

(103) 中屋訳、二九四-二九五頁（Peterson, ed., *op. cit.*, p. 289）。

(104) 中屋訳、二五七頁（訳は大幅に変更）（*Ibid.*, p. 269）。
E. Bancroftあての手紙（一七八九）でも同じように次のように述べている。「もし奴隷制が人を泥棒にしないとしましたら、人間の道徳感覚は異常に強いものとせねばなりません。法律上自分自身の財産をもつことを認められていない人は、財産が暴力以外のなにものかにもとづいていると考えるのは困難なことです…」（富田訳、一一八頁（Padover, ed., p. 100））。

(105) 富田訳、一二〇-一二一頁（Padover, ed., p. 102）。

(106) Peterson, ed., *op. cit.*, p. 1434.

(107) Cassirer, *The Philosophy of the Enlightenment*, p. 242.

(108) 富田訳、三三頁（Padover, ed., p. 33. "We had no occasion to search into musty records, to hunt up royal parchments, or to investigate the laws and institutions of a semi-barbarous ancestry. We appealed to those of nature. . . .")。

(109) Merrill D. Peterson, *The Jefferson Image in the American Mind* (New York: Oxford University Press, 1985), p. 401; M・カーチ、前掲書（上）、二六九頁。Greene, *op. cit.*, p. 409.（アメリカ哲学協会について言えば、この協会はほんらいB・フランクリンとその同士たちによってフィラデルフィアに「有用な知識を増進するためのアメリカ哲学協会」（一七四三）という名前で創設されたもので、独立戦争中はその活動を中断せざるをえなかったが、一七八〇年代末には再興し、フランクリンが一七九〇年に死去するまで協会の会長を務めた。その後任には天文学者D・リテンハウスがなり、一七九六年にかれが死去した後、ジェファソンがそのポストを引き継いだ。J・C・グリーン「ジェファソン時代の科学」『日本フォーラム』第十巻第四号〔1964〕，一八-一九頁）。

フェデラリストのR・G・ハーパー（Robert Goodloe Harper）はジェファソンを評して、大学教授や哲学協会の会長といった学究的ポストには向いているかも知れないが、男らしい果敢な決断と行動を必要とする政治家には不向きな人物、大統領には到底不向きな人物と述べている。この表現には党派的なバイアスもふくまれてはいるが、ジェファソンの気質の一面をよく捉えているといえよう（Peterson, *Thomas Jefferson and the New Nation*, pp. 580–581）。
ジェファソンがただたんなる抽象的な政治哲学の思索家ではなかったことは、モンティチェロの家の隅ずみにまでちりばめられたかれの数々の発明と創意工夫を一見しただけでも分かるであろう。筆者自身、ジェファソンに関心を持つようになったのは、旅行の途中たまたまモンティチェロの家に立ち寄って以後のことで、この建物は四方八方に伸びひろがるジェファソンの知的好奇心と、身辺のありとあらゆる具体的事柄によせるかれのあくなき関心を手にとるように示しているといってよい。史家ペドーヴァーはこのジェファソンの驚くべき多面性を次のように描写している。「二世紀前のフランシス・ベーコン卿のように、ジェファソンはすべての知識を故国のために吸収した。かれの知的な関心と科学的な関心には全くびっくりさせられる。かれは測量師であり、数学者であり、ヴァイオリン演奏者であり、建築家であり、植物学者であり、地理学者であり、人種学者であり、天文学者であり、農学者であり園芸家であり、法律家であり、家具ディザイナーであり、発明家であり、技術者であった。かれの手紙を一眼見ただけで、かれが、造園や、砲術や、米作や、オリーブ栽培や、護岸工事や、医薬や、織物や、鋳物や、ギリシア語・ラテン語文法や、詩形論や、度量衡や、代数学や、楽器や、教育や、海水の蒸留や、インディアン語や、宗教や、養蚕や、紡績機械や、蒸気機関や、硫黄や、海潮や、ブドウ栽培や、速度計や、製材場や、羊や、流星や、プラウや、硬貨や、運河や、化学や、暦や、水雷などのことに没頭していたことがわかる。かれはどんなことでも、なにか知っていたが、ある事柄については、非常によく知っていた」。ソール・K・パドーヴァー（中屋健一訳）『アメリカ思想を形成した人たち』（有信堂、昭和四十年）五五頁。

(110) 『ヴァージニア覚え書』ははっきりした方法的自覚のもとにかかれてい

る。ジェファソンはジョン・アダムズにあてた手紙（一八一二年六月十一日）のなかで、インディアンにかんする従来の記述と研究態度の杜撰さを批判して、フランス人Lafitauの本を例にあげ、Lafitauはヨーロッパ、アジア、アフリカの古代諸民族の神話、政治制度、風習にかんする“a preconcieved theory”を携え、そのフレームのなかにインディアンをあてはめ、たんに一般理論の確認（“a confirmation of his general theory”）をしようとしているに過ぎない、五年間も伝道者としてインディアンの間に生活しながら、Lafitauは「彼の事実を彼自身の観察からよりも、他人の著述のほうからより多く収集している」、と恐ろしく手厳しい評価を下している（Peterson, ed., *op. cit.*, p. 1261）。また『覚え書』「質問6」でジェファソンはビュフォンとドオベントンのアメリカの動物にかんする論議を取り上げた際、これら両者はアメリカの動物の寸法や重量を測ったり実際にみたりしたことはないようであると付言して、知りもせず実際に見てもおらないくせに生半可な論議を展開しようとしているこうした碩学の思弁的、机上論的研究姿勢の愚を手厳しく衝いている（*Ibid.*, p. 177）。そしてビュフォンのインディアン論にかんしては、それは「イソップの寓話」（the fables of Aesop）とおなじ程度の真実性しかもたぬと一蹴して、自分自身の実証的手法にかんする並々ならぬ自負を表明している（*Ibid.*, p. 184）。こうした論争点に臨む際、ジェファソンは経験主義的なスタンスをとるのをつねとした。たとえば高い湿度は動物の成長を妨げるというビュフォンの説にかんして、かれはこう述べている。「この問題の真偽はアプリオリな推論（reasonings a priori）によって検証することはできない。自然はその作用のしかたをわれわれから隠しているのであって、かかる問題にさいしてわれわれが唯一訴えうるものがあるとすれば経験以外にない。そして私見によれば、経験はこの仮定に反している（experience is against the supposition）」（*Ibid.*, p. 170）。

ジェファソンの数量化への異常な関心は、たとえば国勢調査の方法をもっときめ細かくせよという提唱にも示されている（Padover, ed., *The Complete Jefferson*, pp. 998–999）。そしてこの即物的志向と反比例するかたちでかれはプラトン的な神秘主義を嫌悪した（たとえばプラトンを論じたアダムズあての手紙の中には、（プラトンの）“his foggy mind”あるいは“his foggy conceptions”といった言葉がくりかえし出てくる。*Ibid.*, pp. 1034–1036）。

(111) Peterson, *The Jefferson Image in the American Mind*, p. 406.

(112) 史家J・C・グリーンはジェファソンのこうした志向を「事実収集の情熱」（a passion for collecting facts）、「測量熱」（a mania for measurement）といった言葉でよんでいる。Greene, *op. cit.*, p. 30.

数量化が可能な分野では徹底して数字に訴えようとするこの叙述スタイルはたとえばヴァージニア西部の「天然橋（natural bridge）」という自然のアームの優雅さと崇高美を描写する場合にも発揮されていて、ジェファソンはまずそのアームについて、「ある測量によれば、この亀裂はちょうど橋のところで深さ二七〇フィートであるが、別の測量によれば二〇五フィートにすぎない。幅は底で四五フィート、上端で九〇フィートである。……橋の幅は中央部で約六〇フィート、両端ではこれよりも広く、厚さはアーチ型の頂上で約四〇フィートある」といった筆致で、一見無味乾燥な形状にかんする測定値をこと細かに読者に伝えることから筆を起こす。そして月並みな自然の賛美者や観賞家がよくやるように、主観的な陶酔気分と高揚感をストレートかつ過剰気味に表出するのではなく、対象の“dispassionate”な叙述のあとにはじめて自分の嘆息を簡潔に書き添えるという抑制のきいた文体をとっている。Lee Quinby, “Thomas Jefferson,” p. 350; Cohen, “Thomas Jefferson and the Problem of Slavery,” p. 513.

(113) 中屋訳、二五九頁（Peterson, ed., *op. cit.*, p. 270）。

(114) Van Evrie, *White Supremacy*, pp. 281, 282, 283, 285, 290–291.

(115) Josiah C. Nott, *Two Lectures*, p. 17.

はやくも一八一一年、Charles Caldwellは『アメリカ歴史・政治評論』（*The American Review of History and Politics*）誌上で、単元論を擁護したS・S・スミスの護教的著作『人類の皮膚の色および姿態の多様性に関する一試論』を批判し、「その（聖書の――筆者）領域は道徳（morality）にあるのであって自然学（physics）にではない。その目的は実践（practice）にあるのであって理論（theory）にではない。それは我々にあらゆる義務の道を明らかにするものではあるが、自然学（natural science）の主題に関しては何も述べてはいない」と述べて、聖書の命題をそのまま自

然科学の分野に持ち込もうとする研究態度を戒めている。Greene, *op. cit.*, p. 332.

(116) Nott, *op. cit.*, p. 51.

(117) William Ellery Channing, *Emancipation* (Boston, 1840. Reprint edition 1969 by Arno Press, Inc.), pp. 61–63.

(118) キンモントのこの本は現在では入手できないが、右のChanningの本の末尾にかなり詳しく註として引用されている。*Ibid.*, pp. 110–111.また次のものも参照。George M. Fredrickson, *The Black Image in the White Mind* (Harper & Row, Publishers, 1971), pp. 104–105.

(119) H・B・ストウ（山屋三郎、大久保博訳）『アンクル・トムズ・ケビン』（角川文庫、昭和四十六年）（上巻）、六一頁。

(120) 同右（上巻）、三三六頁。

ニグロの「心」はこのように高く評価されたが、「頭脳」の劣等性の方はアンテ・ベラム期のアメリカに深く浸透していた。たとえば青年期のラルフ・ウォルドー・エマソンは、「すべての人間は生まれながらに平等である」というテーゼは正しくなく、むしろこの逆こそが真実であり、人間には個人差のみならず人種差もあるのであって、自然はそれぞれの人種に違った程度の知性を授けていること、また「この不平等は、ある者は指揮者となり、ある者は服従すべきという神意を表していると言える」こと、さらに「犬や馬が人間のすぐれた知識に頼るときに感ずる喜びや信頼は、人類自体の劣等な部分が高等な部分に対して感ずる喜びや信頼と同じなのだ」ということを、一八二二年十一月八日の『日記』のなかで論じている。ヴィンセント・フライマーク、バーナード・ローゼンタール編（谷口睦男監訳）『奴隷制とアメリカ浪漫派』（研究社、一九七六年）、一二七―一二八頁。

なお「頭脳」と「心」という『ヴァージニア覚え書』のフレームは、アンテ・ベラム期には過激なアボリショニストですらこれをそのまま踏襲するにいたる。たとえばマリア・チャイルドは『アフリカ人と呼ばれるアメリカ人のための訴え』（一八三八）のなかに「第六章　ニグロの知性」、「第七章　ニグロの道徳的性格」と題する二章を設け、「第六章」ではその劈頭、「アフリカ人とその子孫にたいするわれわれの義務がどういうものかを決するためには、われわれはまず彼らが人類（human beings）であるのかどうか、すなわち彼らが他の人間と同じ改善能力を備えているのかどうかについて、はっきりと確認しておかねばならない」と述べ、この章の末尾で「かずおおくの立派な例外があるとはいえ、わたしはニグロが一つの階級として見るかぎり、無知でそれ以外の方向にはいきようがなかったかのように見えることは認めるが、しかしこうした状態は彼らが解放されるに正比例して終わりをつげるものである。欠陥は彼らの置かれた不自然な状況にあるのであって、彼ら自身のうちにあるのではない。専制はつねに知性を畏縮させてしまうのである」と結論づけた。ジェファソンとは逆に環境決定論をとっているとはいえ、フレーム自体はジェファソンのそれをそのまま受けついでいるわけである。チャイルドはまた「第七章　ニグロの道徳的性格」のしょっぱなでは、「ニグロが知性面で本性上おとっているという見解は、白人のあいだにほとんどあまねく広まっている。しかしニグロが他の人間よりも邪悪であるという信念は、思うにそれほどひろく広まってはいない。実のところわたしはニグロ人種の賛美者では到底ないようなひとびとが、ニグロは親切な感情と強い愛情を顕著にもちあわせていると主張するのを耳にするのだ」と述べている。ニグロの知的劣等性と心の面での優しさ、けがれなさという図式は、『ヴァージニア覚え書』から『アンクル・トムズ・ケビン』にいたる全期間にわたって一貫してアメリカ白人のニグロ・イメージとして底流しているわけである。L. Maria Child, *An Appeal in Favor of Americans Called Africans* (New York, 1836. Reprinted in 1968 by Arno Press), pp. 148, 171, 177.

史家John W. Wardが*Andrew Jackson—Symbol for an Age* (John William Ward, 1955) のなかに「自然」「神」「意志」という三つの主題を設定し、「自然」の第三章と第四章の表題をそれぞれ「自然の貴族」、「農夫と大学教授」というジェファソン的タームで銘うってジャクソン時代の理念を分析したことは周知のとおりである。なおジェファソンの文明にたいする不信感はたとえば、マディソンにあてた次の手紙（一七九七年一月一日）に示されている。「文明と呼ばれているものは、人間に『すべての人のすべての人に対する戦い』の原理をより大きな規模において実行することを教え、そして、種族間の小さな争いの代わりに、地上のあらゆる地域を

同じような絶滅行為のなかにまきこむこと以外に、どんな効果もうんでいません」。富田訳、一四九頁（Padover, ed., p. 123）。

（この論文は神戸女学院大学、大学研究所の助成金の成果である）

（原稿受理一九九〇年九月十四日）